

勝鬘經宝窟における仏性義

三 桐 慈 海

一 勝鬘經の概略

勝鬘經は具には勝鬘師子吼一乘大方便方広経といい、法華経や維摩経と共に、聖徳太子の三経義疏の中の一つとしても取上げられていて、よく知られた經典である。勝鬘經に説かれている如来蔵思想は、インドでは直接に宝性論や大乘集菩薩学論に大きく影響をあたえて、その思想展開を見ることができるようである。しかし中国では、先行して翻訳された涅槃経の仏性説との関わりにおいて理解され、法華経の一乘思想の展開のうちに位置づけられる。そしてやがて起信論と密接に関わることにより、中国に独自に発展した華嚴教学の上で、如来蔵思想の展開を見ることがなるのである。

南北朝時代より隋の統一に至る中国の仏教界は、実践を主体とする北地に対し講経中心の南朝仏教という、その性格を異にしながらもそれが統合される経過の中で、多くの經典が研鑽されて註疏が著わされた。それは経題釈を中心とする玄義や、随文釈を主として構成される義疏の形態と共に、当時の主要な課題が論究せられている大乘義章の形式も、数多く行われていたようである。現存する淨影寺慧遠のそれや吉蔵の大乘玄論に、その様相を見ることができ

る。それらの課題の中でも殊に重視されていると思われるものに、二諦義と共に仏性義がある。二諦は心の所観としての法が、真実と世俗においてはたらくあり様を問題とする。それに対して能観の心が証悟にどのように作用しているかが、仏性義の課題となる。吉蔵が著わす仏性義の初めに、十一家の異解が挙げられるのも、そのような能観の心の主体はどのようなものであるかが問題となるからである。

吉蔵が会稽の嘉祥寺に止住していた間は、講義が行われると門前は市をなしたと伝えられている。そこでの講義は、師の法朗より授けられた大乘義が中心となり、八不義や二諦義、仏性義、一乘義などであり、それら諸義の基本的な形態が大乗玄論に残されていると考えられる。またそれらの大乘義に関連して經典が解説されたことも、たとえば一乘義に関連して法華經を、仏性義に関連して涅槃經を、というように行われたであろうことも当然考えられる。大品義疏や法華玄論、法華義疏などが嘉祥寺で成立したのであろうことは、既に論じられているところである。現存する多くの吉蔵の注疏は、その大半が後に長安において著わされたとも考えられているが、逆に嘉祥寺の時代から、既に講義の原形態は出来上っていたと考えることもできる。煬帝の要請を受けて慧日道場へ入った後に、命を奉じて三論玄義を著わした。吉蔵の思想形態から言っても、それに続いては中論疏か浄名疏が著わされてもよいように思えるのであるが、それらは長安に入ってから著わされ、慧日道場では勝鬘宝窟が著わされている。その理由を江南仏教の風潮に随順したと見るか、勝鬘經には最も重要な大乘義が含まれているとしたのか、いずれにもせよ勝鬘宝窟を著わす深い理由があったに違いない。^①

勝鬘經は良く知られた經典であるが、法華經や維摩經に比して内容は難解である。波斯匿王と末利夫人が相語らつて、阿踰闍国に嫁いだ娘の勝鬘夫人に手紙を送り、仏の教えを聞くことを勧める。そこで勝鬘は仏を供養し教えを受けて、仏より受記を得て、「犯心を起さない」などの十大受を決意し、また三大誓願を立てた上で、それらの誓願が撰受正法という一大誓願に集約されることを述べる。これより撰受正法章とされる。即ち八万四千の法門といわれる

あらゆる教法は、撰受正法より出生し、それらは方便であるとして撰受正法に収められる。この関係を理解した勝鬘は、撰受の正法が正法を撰受する者に領解される時、諸仏に授記されるのであると説く。次いで一切の法を出生する撰受正法は大乗であるとして、大乘が一切の声聞・縁覚・世間・出世間の善法を出生し、またそれらを撰受するといふ一乗章が説かれる。それは二乘三乗と如来との関係を示すとともに、その相違を明らかにしていこうとするのである。例えば阿羅漢辟支仏は一切の功徳を成就し、般涅槃すると言われているが、その功徳は有量であり仏の方便であつて、眞の般涅槃は如来においてのみ言い得るといふ。これと同様の手法で二種生死や煩惱・四智・三帰依などの上に、一仏乗と三乗の関係を明確にしていくのである。この章において一乗は第一義乗であることを明らかにしてより、一切煩惱蔵を破壊するものは第一義智のみであつて、声聞縁覚が聖諦を觀ずるのも究竟の智ではなく、阿耨多羅三藐三菩提に向う智であるといふ。ここに如来が覚知し開現し演説したもうものが聖諦であるとする。この聖諦に關連させてこれより後に如来蔵が説かれる。

聖諦は如来が覚知し開現演説されたものであれば、それは甚深の意義を説くものであり、甚深の如来蔵を説くものである。それはまた如来蔵において聖諦が説かれるともいえる。このように説明した上で、如来蔵が如来の法身と仏境界と方便との關係にあることを示す。先ず仏の境界が作と無作の二種の四聖諦で表わし得るとし、次に如来の法身が煩惱蔵を離れないで在るあり方を如来蔵と名づけるとする。煩惱蔵を離れないということは、常に煩惱を見つめながらそれを空じていく如来空智であり、それが如来蔵智であることになる。そこで如来蔵空智が煩惱を否定していく空如来蔵と、煩惱蔵との區別を見ない不空如来蔵の二種のはたらきがあることを示す。四聖諦の中で常と無常、四顛倒と正見、四依と一依などの關係も、如来蔵の意義を明らかにする礎材となる。

如来の法身が煩惱蔵を離れないで在るのが如来蔵であるならば、生死流轉の衆生と別ではない。しかも衆生が生死流轉であることを知らせるはたらきとして如来蔵がある。このように説くならば、如来蔵がもし生死のように生じ滅

する有為相であるならば、生滅の生死流転であることを知らせることはできないから、それは常住不変であり依り処となるものでなければならぬ。依り処となるのならば、輪廻の主体ともなる我・衆生・命などと同じであるかという、勿論そのようなものではない。それは苦を厭い涅槃を樂求させようとするはたらきである。そのようなはたらきである如来藏は法界藏であり、法身藏・出世間上上藏・自性清淨藏であるという性格をもつ。しかも自性清淨である如来藏は、煩惱に汚されることなく覆い隠されているだけだと言うのではなくて、客塵煩惱と上煩惱に染汚されるという、不思議の如来の境界であると説かれているのである。

如来藏を中心として勝鬘經を眺めてみたのであるが、この中で撰受正法と一乗は、どのように関連づけられて理解されていくのか。また吉藏は如来藏と仏性の意味を、どのように考えて經典解釈に用いるのか。このようなことが問題となってくる。また仏性とはどのようなことなのか、涅槃經ではどのように説かれているのか。このようなことは従来に多くの研究があるのであるが、あらためてこれらのことに思いを寄せて、經典を読んでみたい。

二 釈一乗章の仏性

勝鬘夫人を法身の居士と位置づけ、法華經が廻小入大の菩薩のための説法であるとした吉藏は、勝鬘經を直往菩薩のための教であるとする。そして宗旨を弁ずるの項において、「この經は章十五といえども、その旨趣を統れば、一乗をもって宗となす」と、一乗を説く經典であると説明した。これはもとより經題に「一乘大方便」とあることにもよるが、吉藏が十五章に分ける經の内容において、釈撰受正法章の後に釈一乗章と区分される長い範圍をしめる説述があることによる。勝鬘經が強調する菩薩行としての撰受正法は、一乗が諸乘を生じ、諸乘を撰めて一乗に帰すように、出生と收入において一乗と同じであると言う。そこで一乗章の第三釈名門では、理・教・因・果において一であることが一乗であると説明する。その上で法華論を引用して「同義と言うは、如来法身・声聞法身・緣覚法身、三乘

人同じく一法身なるをもって、この故に三乗同じく一乗に名づく」として、普遍する法身において同義であり、そのように一乗であることが述べられる。そこで次に乗の体を明かす第四明乗体門^④において、諸論を引用して乗の体を四種列挙する。

第四明乗体門。乗体不同、略明四種。一依法華論、云何体法者、謂真如法身、為一乗体也。此就根本釈体、根本即是真如法身。真如法身是仏性、故説為本。然後方有修因得果。二者亦如法華論云、以無上菩提、為一乗体。此擧顯時、究竟果乗体也。三者以万行為体。如智度論云、六波羅蜜以為乗体。此就因乗。四者以慧為乗体。如撰論云、乘以智為体。此就主為言。乘雖具万行万徳、而慧為其主。

先ず一乗の体が真如法身であるとするのは、根本について言うことであり、真如法身を求め仏性を得ることが、一乗を説く目的であることを示す。後に慧を説明して「又一切衆生悉有仏性。仏性者即覺性。覺性者即是慧也」と述べるから、仏性があることによって因行を修し、覺性である智慧の果を得ることになる。次に無上菩提を乗体とすることは、六波羅蜜をはじめとする万行が、無上菩提に集約されて究竟の果体として顯われた場合を言う。したがって第三の万行が因乗として、乗の体とされることにもなる。第四の智慧をもって乗体とすることも、修因得果において万行万徳を備えていく中心に、智慧が主体となつてあることを示しているのである。乗の体を吉蔵は一つにしほらず、その表わさんとする状況に随順して説明する。この四種の乗体を挙げた後で、設問して本経に用いられている何の法が乗体かというのに対し、因行・果徳・涅槃・四智を列挙している如くである。しかしここに法華論などを引用して四種を引くことには、仏性という課題において乗体を明らかにしようとしているように思われる。すなわち「真如法身是仏性」とし、「乘雖具万行万徳、而慧為其主」、「仏性者即覺性」と述べている。真如法身を究竟の果体として得られることは、万行万徳が果報として具わることであり、仏性を得ることである。また仏性が悉有することによって因乗果乗が成り立つことになる。無上菩提を求め万行を修することによって、法身を得て万徳が具わることを、このよ

うな四種の乗体として表わしているのである。

勝鬘經の積一乘章と区分されるところは、阿耨達地が八大河を出すように、摩訶衍が一切声聞緣覺世間出世間の善法を出生す、というところより始まる。攝受正法は大乗であり、大乘より二乗などの一切の善法を出生するというところから、攝受正法は一乗であり、一乗は諸乗を出生するということになる。また諸乗を擧めて一乗に歸せしめるから、攝受正法における出生と收入が、一乗ということにおいて、如来の教法そのものであることを示すことになる。吉藏が第八攝入門の中で、「また五乗作仏とは、五乘人の一乘より出ずるをもつて、この故に五乘同じく一乗に歸す。また五乘同じく仏性あり、故に同じく一乗に入る」と説明する。勝鬘經には如来藏の語は見られても、仏性という語は用いられていない。しかし宝窟において吉藏は仏性の語を用い、攝受正法と一乗を、一乗と二乗・五乗をというように、異った概念の同質化のはたらきをさせているように思われる。これは先に取りあげた乗体四種にも言い得たことであつた。そしてそこでは仏性は覺性であり、覺性は慧であることが示されていた。

宝窟の初めの積序分の中で、仏を説明して「仏は覺なり。覺に兩義あり。一に覺察、二に覺悟」と述べる。覺察とは煩惱障に対するはたらきで、煩惱が侵害するのを早く覺知することである。また覺悟とは智障に対するもので、無明の闇を破り覺悟することである。その他にも覺が説明されるが、自覺と覺他と覺行窮滿も述べられている。積一乘章における随文釈の中で、「諸仏所説攝受正法」の經文を受けて所説の説明をする。すなわち「仏法に二分なり。一には証分、二には説分なり。相を離れて平等にして、自覺と相應す、これその証分なり。言に寄せて徳を顯わす、これその説分なり。証分は言を絶し、説分は顯わすべし。故に今は説分を挙げてその宣揚を勸む。」とある。この証分が自覺であれば、説分は覺他である。吉藏は積序分の中の自覺覺他については、自覺は凡夫に異なり覺他は二乗と別であることを言うのみであつたが、二乗との差違が説分にあることは明らかである。したがって智慧における覺性には、自覺と覺他の二面が含まれていることになる。それならば仏性にもまたその二面がなければならぬはずであ

る。仏性における自覚の分が、四種の乗体のうちの真如法身に対応し得るならば、覚他の分が万行万徳を具えることと相応することになるであろう。仏性という課題と一乗とは、思想的にも深い関りがあるようであるが、中国における仏教研究においては、法華經と涅槃經、そして勝鬘經は一乘義や仏性義において、深い関連を持ちつつ行われたようである。

三 涅槃經の仏性

仏性の意義については涅槃經に、「一切衆生悉有仏性」として詳説されているのであるから、それが涅槃經にどのようなに説示されているのか、中国の諸師は如何にその主旨を了解したのかを検討しなければならぬ。しかし今はそれを考えず、經典に説かれている内容の、展開していく流れに添いながら、何故に悉有仏性と言わねばならなかったかを考えてみたい。そのために四十巻の大般涅槃經よりは、より簡潔な法顯訳の大般泥洹經六巻を用いて、そこに説かれている仏性の意義を概略まとめてみる。

衆生を等しく見ること一子を視るがごとき積尊が、今やがて滅度するであろうと人々に告げられた。お弟子や、積尊と同様の等観の能力をもつ菩薩たちが、世尊に般涅槃しないようにとお願いに駆けつけてきた。彼れらは体中の毛孔から、悲しみのあまり血を雨のように流していた。このような情景からこの經典は説かれていく。それまで供養を拒絶されてきた積尊が、純陀に最後の供養を許された。そしてこの世での如来の長住を請うてはならない。世間も衆生も無常であると観察しなければならぬとたしなめられる。再度にわたって純陀が、如来が世に長存されることを願うと、そこへ文殊師利が口をはさんで、有為轉變の世界であることを観察すれば空慧が具わると告げる。すると純陀は功徳をそなえた如来の寿命がそんなに短いはずがないと反発し、結局は文殊師利をして、如来は常住無為にして變易法にあらずと言わしめる。如来が常住であることは、衆生の愚癡による顛倒の常樂我淨を否定され、無常・苦・

無我と教えられていたものが、教えへの執著が否定されるということ、法身の常・涅槃の樂・仏の我・仮名法の淨とあらためて見なおされることになる。また菩薩の長寿業として衆生如一子想が、四無量心と關連させながら説かれ、金剛身品では如来身が常住身・不壞身・金剛身・非穢食身であることが示される。四法品では「其れ食肉は大慈種を断つ」というように、慈悲が強調されるにいたる。

泥洹經の分別邪正品に到ると、「我れ般泥洹してより七百歳後、如来の教法これより漸く滅し、魔の比丘となりて正法を壊乱す」と述べて、釈尊伝をはじめ多くの事項について魔説と如来の説とを峻別した。その中で突然に「また比丘あり、広く如来藏經を説いて、一切衆生にみな仏性あり。身中に在って無量煩惱悉く除滅しおわって、仏便ち明顯す。一闍提を除く」と「我が身中に実に仏性あり」と主張することが「実に仏性あって施戒生ずるが故に」如来所説の経律であると述べる。また附隨して「復た比丘あってこの思惟をなす。我れまさに成仏すべきこと決定して疑いなし。この思惟をなすに、未だ道果を得ずといえども、その福無量なり」という。旧来ならば悟っていないのに悟ったという両舌の重罪にあたるかも知れない。それを「如来の眞性これに由って顯現す」とし、「大悲世尊にしてこの説をなす」のであり、如来の所説であると認めるのである。これにより仏性・如来性が衆生に悉有することが説かれていく。如来性品にいたると「眞実我はこれ如来性なり。まさに知るべし一切衆生に悉有す。但だ彼の衆生の無量の煩惱に覆蔽せられて現れず」と、一切の衆生に仏性が悉有するあり方が説示されるのである。しかし如来性は声聞や辟支仏には難見難得の宝であって、十住の菩薩ですら自らの中に如来性を觀察して、惑想を生じるものであると警告し、「如来の性は甚深難見にして、ただ仏の境界」であることを重ねて主張する。そして如来性を觀察することができるのは、如来の契經に隨順し、信心方便してその後で等しく觀することができるのであり、大般泥洹經に信心を生じた上で、それ自身に如来性ありと知ることができるとするのである。

涅槃經に仏性が説かれていく様子は、いささか唐突の感をまぬがれない。しかし釈尊の入滅を主題として仏陀とは

何かを問う時、釈尊の入滅が衆生の救済に繋がらなければならぬはずである。入滅は別離であり、残された弟子達にとって釈尊の教化からの断絶であり、この上ない悲劇であるということである。難値難見難聞難信の嘆きもそこにある。しかし釈尊との死別への悲しみを、如来の法身常住に切り換えることによって、如来の大悲の強調へと質的な転換をさせていった。釈尊が八十歳で病を得て入滅されたということは、証悟を得られて仏陀となられた釈尊が、我々と同じく老病死の苦を受ける人間であったということ、あらためて深く認知させられた出来事であった。しかしそれはまた同時に仏陀としての証悟の内容は、釈尊の入滅にもかかわらず真実であり、変ることではないとの確信を得たことになる。仏陀が考病死の苦を同じく受けるということは、我々が誰でも仏陀になり得ることの証明であり、他方に仏陀の法身は常住であることの立証であった。換言するならば釈尊は入滅の相を取ることによって、すべての衆生が成仏する可能性と、そのための真実の教えは変化せずに永遠に存続することを、身をもって教えたことになる。

少なくとも入滅後七百年を経た後の涅槃経成立の時期にも、そのように考えた奉仏の徒がいたということである。釈尊滅後の時間の経過の中で仏陀観は人格化の方向に進んだ、とする見方もあるようである。しかし仏陀の教えを学んできた人々は、釈尊の死を常に現実の課題として見つめながら、そこに大悲のはたらきを感得して、仏陀観を展開させていったと見るべきである。その場合に仏陀観を法身常住と設定したことは、仏陀の覚証した法が不変であり普遍であることの主張である。常住身であり金剛身・不穢食身であると主張した法身が、釈尊の説法である無常・苦・無我の教法とどのように関わるのか。邪正品の課題はここにある。そのような矛盾に決着をつけていこうとする中で、一切衆生悉有仏性の考え方が打ち出されたことになる。法身常住という法身が、法性身とも言うものであり、法性を所証としている。法性は般若経より法華経に到るまで、大乘仏教の中で求められてきたものであり、「法が法であること」の意味を持つ。それならば仏性もまた「仏が仏であること」の意味を持たなければならないであろう。「仏であること」とは法性であることではなくて、法身であることであろう。仏陀は少なくとも基本的に人格なのであり、

その人格が内容を法化したものである。したがって邪正品に仏性が主張されたのは、法身常住を踏まえてのことである。一方、仏陀には覺他の面が要請されるが、經文中の断肉をはじめとするいくつかの慈悲の強調は、その基盤である。一切衆生に仏性が悉有するということは、釈尊の死ということにおいて、生滅する衆生はすべて仏陀になり得るという、最大の大慈悲の証明となっている。このように考えてくると、一切衆生悉有仏性の教説は、その設定の仕方はいささか唐突なようであるが、その意義からするならば、必然的なものと言わざるを得ない。なお仏性が「身中に在って」「無量の煩惱に覆蔽せられて」ということは、釈尊の入滅によって釈尊の法身は面影をも含めて、すべて衆生の内に在ることになったことの意味である。釈尊の在世中は釈尊が仏陀であろうと師であろうと、弟子にとっては待時する存在であったことは免れない。しかし釈尊の入滅の後には待時する存在ではなくなり、悉有する存在へと変化をもたらしたことを意味するのである。涅槃經を語る奉仏者達は、釈尊の入滅の姿を眼前に見る思いで、そしてやがて時間の経過の中に、別離の悲みから静かな思慕の情へと変化していく、その心の動きを明瞭に把握して、經文の行間に巧みに織り込んでいったようである。このように考えてくると、一切衆生悉有仏性とは直接に成仏の可能性を述べたものではなくて、仏陀釈尊の衆生への永遠の願いとして、その願いを門弟を通して奉仏者達が受け取っていった、そのような意味を持つ教えと思われるのである。

四 宝窟の如来蔵

勝鬘宝窟には如来蔵については明解な説明がされている。釈説自性清淨心隱覆章の第二同異門には、「この經の始終、如来蔵を明かす、凡そ六処あり」として、六章とそれぞれについての略述が附けられている。そこで今はその指示にしたがって、吉蔵が如来蔵や仏性をどのように考えていたかを考えてみたい。

先ず釈説如来蔵章第七に如来蔵の積名門^⑥がある。ここでは世親著真諦訳とされる仏性論によって、如来蔵の意味が

解説される。

言如来者、体如而来、故名如来。依仏性論、藏有三种。一所撰藏、二隱覆藏、三能撰藏。所撰藏者、約自性仏性、説一切衆生無有出如如境界者、並為如如之所撰、故名藏也。則衆生為如来所藏也。隱覆藏者、如来性住在道前、為煩惱隱覆、衆生不見、故名為藏。前是如来藏衆生、後是衆生藏如来也。能撰藏者、謂果地一切過恒沙功德、住応得性時、撰之以尽、故能撰為藏也。

如来藏の如来は如を体して来たるの意味。藏には三種の意義がある。所撰の藏とは、一切衆生は如如の境の域から出るものでないから、如来に藏せられた存在であるということ。隱覆藏とは、衆生にはもともと如来性があるのに、煩惱に覆われて見えない。この双方の意味から、衆生はもともと如来に藏せられていて、その如来性が衆生に藏せられていてという関係にある。能撰藏とは、如来性が明らかに became した時には、すべての功德を藏することになるという。またこれに加えて「如来藏即是仏性」として三義の仏性を挙げる。一には自性住仏性で、これは所撰藏の意味にあたる。二には引出仏性で、初発意より金剛心へと引出するはたらきである。如来性が衆生に藏せられているということは、煩惱に隱覆されていても、常に開發されるべく引出のはたらきをしているということになる。三には至得仏性で能撰藏の意味にあたり、諸仏の三身であるとする。仏性とは法身とそのはたらきであるから、仏の三身と言い得るのである。

次には釈説空義隱覆真実章第九に、空と不空の二智と如来藏が説かれると指示する。その前の章において、如来法性と如来藏の関係を顕と隱に、また藏權を生死とすのに対して藏実を真如仏性と見た。ついで本章では藏の能所に約して、如来藏において藏されているのは真実であり、能藏は虚妄煩惱であるとする。その上で經文の「如来藏智是如来空智」を釈するにあたって、能藏の法である虚妄煩惱は本来に無生畢竟空であることを、仏は了了に知っておられるから、空如来藏智と名づける。また所藏の真実とは中道仏性であり、一切の徳を具していることを知っておられる

から、不空如来蔵智ということになる。仏はこのように空と不空において如来蔵を知っておられる。しかし逆に衆生や二乗はその語に執着を起こして、その語でもって如来蔵を隠覆している。このように空が仏性を覆うのを隠真実という。同じく真実を表わす言語も執着によって誤りを犯すことが示したのであり、吉蔵は「これ乃ち是れ仏法の大宗、得失の根本なり。心をその門に留むべき哉。この旨を見んと欲せば、まさに龍樹の中観論を尋ぬべし」と述べている。

三には釈説顛倒真実章に、如来蔵が染と浄の双方に依持となることを明かすという。この章に区分される経文を挙げながら解説してみると、「生死者、依如来蔵」は、生死の本因とも言うべきものは如来蔵であって、外道のようにに邪因を立てたり無因を主張しては誤りである。また結業によって生死があると考えている小乗や他の大乘の考え方も、根本を窮めていない説である。そのような考え方に対処する意味と、一切の衆生には仏性があるということを示すために、如来蔵によって生死があると経は説くと言う。これは衆生の生死流転が迷いでありながら、結局は成仏のためなのだということを示すのである。それであるから次の「以如来蔵故、説本際不可知」は、如来蔵は本来無始なるものであるから生死も無始である。無始より以来、如来蔵に依って生死があることになる。「是故如来蔵是依是持是建立」の文を、如来蔵の体は無為常住であるから、衆生のための所依処となり、連続せしめて、成仏することを得しむと解釈する。次に「如来蔵者、無前際、不起不滅法。種諸苦、得厭苦樂求涅槃」の経文がある。如来蔵は無始本有であり起滅がないから、むしろ染と浄の因となる。その場合に諸苦を種植えたり、逆に苦を厭うたりするのは、妄心であって仏性ではない。ちょうど海の水波が風によって波立ったり、静かになったりするとき、海自体が波立つのではないようなものである。しかし海があつて波立つように、仏性があつて苦を植えたり厭うたりするのであるから、そのようにこの章の大意を理解すべきであるという。

この章の結文には、如来蔵が三種の衆生の境界とはなり得ないことを述べる。それは凡夫外道で五陰の身内にあつ

て、我ありと見る身見に随した衆生。法身の常樂我淨において無常等の四顛倒を起した、二乗などの顛倒の衆生。初学の大乗人などの多くは空觀などを習い、眞解を妨乱する空乱意の衆生である。これらの衆生は如来藏を藏しているけれども、如来藏の境界ではないと捨遣する。この「非境界」として捨遣されるのは、如来藏を有所得として了解していこうとするすべてにあたる。吉藏はここで、常樂我淨を計する人、無常無我を計する人、あるいは本章までに述べられてきた如来藏を了解した人々、例えば能藏所藏ありという人、生死のために依・持・建立となると言う人、これらの有所得の人々ならばすべて捨遣されなければならない。これは第四の一切の相を絶する章である。

第五に釈説自性清淨心隱覆章第十三、始めの文に五藏の義があり、これらが仏性論によって説明される。列挙すれば一に如来藏、無我を相とする如来の自性であり、諸法の体性ともなる。二に法界藏、聖人の行境界で正法藏ともいわれる。因行の意義をもつ。三に法身藏、至得の仏果をあらわす。四に出世間上上藏、因縁の相ではなく世間を超えた眞実の意義である。五に自性清淨藏、秘密甚深の意義である。このように如来藏に五種の意義が立てられるのである。

第六に如来藏は自性清淨であるけれども、煩惱に染せられることを明かすという。この章の經文の中で「然有煩惱、有煩惱染心。自性清淨心而有染者、難可了知」の文がある。吉藏はこれを解釈して、煩惱によって刹那心が染汚されることは、あり得ないことで、煩惱が染汚しようとしても染せられない。しかし衆生にあってはそのままに煩惱があり、煩惱に染せられた心があって、不染にして染である。その場合に、前心は淨で後心は垢となる。垢心が起る時、淨心を障う。ところで三界の龜心が染せられることすら、了知することが困難であるのに、自性清淨心でありながら染せられることは、容易に了知できない。ただ本性清淨といっても、衆生においては顛倒不淨となるので、それを客塵煩惱に染せられると言うのである。したがって客塵煩惱に染せられても、しかも常に本性清淨である。このように了解しているのである。

如来蔵が説かれている六処、と吉蔵が指示することに依って、その経文についての吉蔵の解釈を列挙してきた。これによると本来、如来は衆生を蔵しているから如来蔵と言い、それだから衆生の心身の中に如来蔵があるという。虚妄煩惱によって蔵されている如来蔵は、自性清淨であり眞実であるが、蔵している虚妄煩惱は染である。だから如来蔵は染汚されないままに染汚されており、それを隠覆と言う。如来蔵それ自体は、虚妄煩惱を空しいこうとしてはたらいっており、そのはたらきによって如来性を顕現させていくことができる。宝窟において吉蔵は、如来蔵をこのよう空するはたらきと見ていたようである。

五　む　す　び

釈説如来蔵章の来意門には十数項にわたって、如来蔵が説かれるにいたる理由が挙げられている。その一つは前章からの一乗や無辺聖諦を受けて、聖諦が甚深なのは如来蔵が甚深だからであり、一乗は蔵によって成ずと明かすためであるとする。また後の章に関連させて、如来蔵によって顛倒と不顛倒の義を、成ずることができるところであるとする。その他には、断見の衆生が衆生性は草木のように、この生で尽きてしまうと考えるのに対して、如来蔵があるから必ず仏になると教えるためである。また自分自身に仏性があり、菩提心を発して修行し、成仏させるためである。他の人の心身の中に仏性ありと知り、殺などの十悪業を行わせないようにするためであるなどが挙げられる。また「また般若を説かんと欲するが故に仏性を説く。般若は即ちこれ中道の智慧なり。中道の智慧は衆生をして有無の二見を遠離せしむ。生死の中に虚妄の我なしと知らしむるが故に、その有見を息む。如来蔵あり、無見を息む」とし、「かくの如き等の諸因縁を以ての故に、如来蔵を説く。これはこれ仏法の大意なり」と述べている。これらの表意の中で、顛倒と不顛倒の義を成ずとか、菩提心を発し成仏せしめるとか、あるいは如来蔵があるによって無見を息むなど、吉蔵の述べている理由を眺めていると、衆生の存在そのものが、成仏への道を歩んでいるものと意義づけている

ようである。「如来蔵に由つて顛倒成すと言うは、衆生は仏性を失す、故に苦海に輪転す」と述べているが、仏性を失すとは忘失の意味であろう。先に取りあげた釈説顛倒真実章にも、生死の無始と如来蔵の無始が論じられていた。また自性清浄心を述べるところでも、不染の染と染の不染とが述べられていた。勝鬘経では「了知すべきことかたし」とあるのみであるが、仏性論などを引用しながら、如来蔵が衆生の煩惱蔵に隠覆されながら、所蔵としての真実によって、煩惱が破壊されていく状況を明らかにしていた。このように吉蔵の如来蔵の意義を見ると、それは非常に積極的であり動的な解釈である。単に成仏への可能性というのではなく、成仏に向わせる原動力であり、そのはたつきは無始より以来の如来から、はたつきかけられてあることを明らかにしている。そしてこのような解釈は涅槃経の仏性の意義と同じである。

仏性と如来蔵の意味を、吉蔵はあまり区別していないようである。区別というより混用していると言った方がよい。如来蔵と言いながら、いつの間にか仏性と言ったりする場面も多い。もともと如来蔵と仏性の語感には、差違があるはずであるから、その使い分けをしたと思われるところもある。涅槃経に一切の衆生には悉く仏性があると説かれていることが、法身常住の如来が衆生救済の慈悲を働かせて、衆生に平等に一子を見るように、働きかけていることを意味する。衆生に仏性があるということは、衆生に常に慈悲の作用がはたきかけられていることになる。しかもそのはたつきかけが衆生に覚知されていて、常に衆生をして成仏へと向わせており、その状況を悉く仏性というのである。勝鬘経にみられる如来蔵は、自性清浄ということを言い、煩惱蔵を離れずといっても、涅槃経のように慈悲を強調することはあまりない。しかしその機能は仏性と如来蔵と相違はないようである。經典を知悉している吉蔵が混用するのも、やむを得ないことであろう。しかし混用することが、むしろ勝鬘経の如来蔵を積極的に解釈することになったのかも知れない。

吉蔵の仏性義を検討するには、大乘玄論に収められている仏性義を明かにしなければならぬ。また中観論疏にみ

られる中道仏性は、もっとも重要であろう。しかしそれらに先がけて、勝鬘経が解説されているのであって、そこに積極的であり動的な如来藏義が示されているということは、吉蔵の教学全体にそのことが及んでいくように思われるのである。

- ① 拙稿「勝鬘経宝窟の撰述について」大谷学報第六十五卷第二号（昭和60年）参照。
- ② 勝鬘経の解説は多くある。中でも近くは高崎直道著「如来藏思想の形成」（春秋社一九七八年・一〇〇～一二七頁）にまとめられている。ただし本稿では如来藏の語を中心に、簡略にまとめた。
- ③ 勝鬘経宝窟卷中本（大正37・41a）
- ④ 涅槃経の解説は、横超慧日著「涅槃経」（サーラ叢書26・平楽寺書店一九八一年）に詳細に説明されている。
- ⑤ 勝鬘経宝窟は大正藏経第37卷に収められている。しかし国訳一切経・経疏部11に収められている校部文鏡訳註「勝鬘宝窟」は、注において校訂が行きとどいていて、本稿をすすめるにあたって参照した。
- ⑥ 勝鬘経宝窟卷下本（大正37・67b）
- ⑦ 宝性論の仏性思想の本意として、「大乘仏教における仏道体系としての『智慧から慈悲への動向』の事実の表明」であると位置づけられている。（小川一乗著「仏性思想」昭和57年・文栄堂書店・一五一頁）参照。